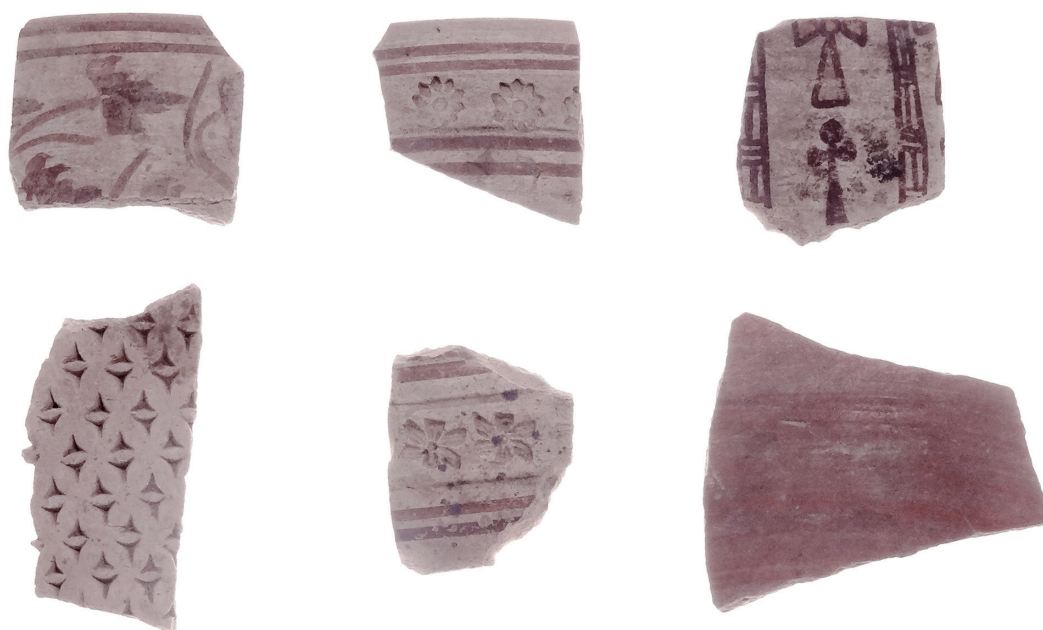


August 2018

京都大学総合博物館 ニュースレター



スーダン出土の彩文・スタンプ文土器（1）（4、5 ページに関連記事）

2018 年「青空子ども博物館 in 円山」の開催.....	2
「子ども探検隊～常設展示のクイズラリー～」.....	2
新任スタッフの紹介.....	3
総合博物館コレクション研究＜3＞ エジプト考古資料の調査.....	4
研究資源アーカイブ通信＜13＞ アーカイブと私（2） 出口康夫先生（文学研究科）に聞く.....	6
総合博物館日誌（平成 30 年 3 月～6 月）.....	8

「子ども博物館」の取り組み

2018 年「青空子ども博物館 in 円山」の開催

2018 年 5 月 6 日（日）に「青空子ども博物館 in 円山」（京都大学総合博物館・円山公園音楽堂事務局共催）が開催されました。普段は京都大学総合博物館のロビーで行われている「子ども博物館」が、京都市東山区円山公園音楽堂の空のもとで拡大版として行われるイベントです。今年で 11 回目となる本イベントは、天気にも恵まれ青空のもと多くの子供たちで賑わうこととなりました。今回は「子ども博物館」スタッフ 8 名によるプログラム「どうぶつしつもんコーナー」「蟲のはなし」「鉱物コレクションをつくろう」「ヤコブの杖をつくろう」「ユニット折り紙をしよう」「身近なハーブと漢方薬」「どうぶつのからだ」「石の中のいきものをさがそう」に加え、「子ども博物館」の常連であった中学生による蚕を用いた観察プログラムも行われました。その様子を見てみると、大学や博物館で学び、今度は自ら発信するといった知の連鎖が見え、感慨深くなります。他にも、昨年度から始まった「絵本の読み聞かせ」は今年も人気があり、最後には、皆で飛距離を競う恒例の「紙ヒコーキ大会」



「紙ヒコーキ大会」の様子

も行われました。大会の上位三名には表彰に加えて、開催にご協力いただいたミュージアムショップ ミュゼップから副賞が贈られました。館の中といった印象が強い博物館ですが、大学院生を中心とした「ひと」が作り出す「子ども博物館」は青空のもとでも、より一層賑やかに博物の空間を創り出していました。

（総合博物館 助教 白勢洋平）

「子ども探検隊～常設展示のクイズラリー～」

子ども博物館は毎週土曜日に当館エントランスで大学院生を中心に行っている対話型解説プログラムです。参加者は小学生の家族連れが多く、土曜日のエントランスは和やかな雰囲気になっています。しかし、参加者から「楽しかったけれど展示が見られないまま閉館時間が来てしまった」「子ども博物館に何度か参加させてもらっているけれど展示をきちんと観たことがない」という声を時々耳にします。博物館としては「せっかく来館していただいたので、展示も観ていただきたい」という思いから不定期ですが、子ども博物館の出し物の一つとして常設展示のクイズラリー「子ども探検隊」を行なっています。クイズは展示の構成に合わせて「自然史編」と「文化史編」の 2 種類を用意しています。

「子ども探検隊」は通常のクイズラリーとは異なり、答え合わせにしっかりと時間を取っています。スタッフと一緒に答え合わせをすることで、参加者が展示について思い出したり、スタッフが展示に関する補足情報を提供することで、参加者に展示をもう一度観てみようと思ってもらえるように心掛けています。「子ども博物館」



の取り組みを通して少しずつですが「博物館」という場所に親んでもらえるきっかけになればと考えています。

「子ども探検隊」を実施している時には、大人の方にもクイズの冊子を片手に常設展示を見学していただければ幸いです。そして、発見があれば是非スタッフに教えてください。

（総合博物館 研究員 中川千種）

新任スタッフの紹介

中川千種 研究員

4月1日着任



研究員として博物館に戻り、ニュースレターで自己紹介を書かせていただくのは2度目になります。博物館に前回在職していた時に担当させていただいた企画展「医は意なり～命をまもる知のあゆみ～」がきっかけで、2015年9月から2018年3月までiPS細胞研究所(CiRA)上廣倫理研究部門にて「iPS細胞研究の倫理」に関する広報業務に従事しました。CiRAでの経験を通して「他者の意見を聴き自分の考えや意見をきちんと発信することの重要性」を改めて感じました。また、「大学」について考える機会にもなり、「大学が社会に対して出来ること」はなんだろうかと考えた時に「大学博物館」の可能性と重要性を感じました。博物館では、「子ども博物館」をはじめとしたイベントの企画運営や資料や標本の貸付け等博物館業務全般を担当させていただいています。来館されたすべての方が「笑顔になれる博物館」になるように努めたいと思っています。

研究員として博物館に戻り、ニュースレターで自己紹介を書かせていただくのは2度目になります。博物館に前回在職していた時に担当させていただいた企画展「医は意なり～命をまもる知のあゆみ～」がきっかけで、2015年9月から2018年3月までiPS細胞研究所(CiRA)上廣倫理研究部門にて「iPS細胞研究の倫理」に関する広報業務に従事しました。CiRAでの経験を通して「他者の意見を聴き自分の考えや意見をきちんと発信することの重要性」を改めて感じました。また、「大学」について考える機会にもなり、「大学が社会に対して出来ること」はなんだろうかと考えた時に「大学博物館」の可能性と重要性を感じました。博物館では、「子ども博物館」をはじめとしたイベントの企画運営や資料や標本の貸付け等博物館業務全般を担当させていただいています。来館されたすべての方が「笑顔になれる博物館」になるように努めたいと思っています。

和田積希 博物館研究員

4月16日着任



前任校の京都工芸繊維大学では、美術工芸品の調査・研究に携わる一方、京都市内にある14の大学ミュージアムで組織する「京都・大学ミュージアム連携」の事務局をつとめてきました。現在も引き続きそのお手伝いをするとともに、こちらの館蔵品のデータ整理作業などに従事しています。

ここは、2012年に京都・大学ミュージアム連携で初めての合同展覧会「大学は宝箱！一京の大学ミュージアム収蔵品展」を実施した思い出深い場所です。あの頃は、同じ大学ミュージアムといっても、収蔵品や活動方針、関わるスタッフの在り方など、大きな違いを感じ、共にひとつの事業をおこなうことは至難の業に思えました。おかれた状況は今も変わりませんが、活動も7年目を迎え、所属館にはたしかになつなかりができたように感じています。より多くの方々に、大学ミュージアムの活動と魅力を知っていただけるよう、仕事に励んでまいります。

佐藤 崇 研究員

6月1日着任



総合博物館では、魚類を中心とした脊椎動物標本の収集・維持・管理業務や標本資料の教育・研究への利活用サービス業務を担当しております。前職では同じ京都大学の瀬戸臨海実験所に所属し、教育拠点研究員として大学の臨海実習の指導支援などに従事しております。

専門分野は分子生物学的手法をもちいた魚類の系統進化学で、主に深海魚や底生魚を対象に形態や生態データを取り込んだDNA解析を進めております。

京都大学の魚類標本コレクションは、本館および舞鶴水産実験所の水産生物標本館に収蔵されており、その標本数は2館あわせて約40万点、国内でも2番目の規模を誇ります。この世界的に見ても有数のコレクションを自身の研究にも活用し、また多くの人に利用してもらえる体制を整えるため、標本資料やその情報の整備に努めてまいります。

仲田志織 オフィス・アシスタント 4月1日着任



総合博物館に収蔵されております地形図や古地図等の資料について、保存環境の温湿度管理や資料調査・閲覧希望等への対応のお手伝いをさせていただきます。

大学院では文学研究科・地理学研究室に所属し、陶磁器製造業を中心とした日本の地場産業を対象として、研究をおこなってまいりました。その多くが家族単位の零細な経営によって支えられている地場産業は、時代や消費者の需要の変化に伴って、現在大きな変容を迫られています。そのようななかで、産地の人々がこの転換期をどう受け止め、どう向き合っていくのかを明らかにすることに主眼をおき、調査を進めております。

総合博物館での業務は、各年代の地形図だけでなく、普段では目にすることのない各種の主題図に触れる貴重な機会であるとも感じております。この業務をとおして、ひとつでも新たな発見があればうれしく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

総合博物館コレクション研究〈3〉 エジプト考古資料の調査 ―資料目録刊行後の研究成果から―

1916年2月、3年間の欧州留学を終えた濱田耕作はロンドン大学のペトリ教授のもとから京都帝国大学に戻り、同年秋の考古学講座創設のための準備を進めた。考古学教育を行う上で必須であったのが、欧州で学んだ最新の考古学の方法論と、総合博物館の前身である陳列館に蓄積しつつあった考古資料である。本稿では濱田の帰国後まもなく陳列館に入った2件の資料を示して、資料受入から100年を経て新たに得られた知見を報告し、2016年のエジプト資料目録＊1（以下、目録）刊行後、さらに進展した研究成果の一端を紹介する。

コプト織物および織物断片

陳列館考古資料の登録番号〔1115〕と〔1126〕のコプト織物は、1916年3月30日に濱田耕作によってもたらされた資料群の一つである。年代不詳かつ出土地不明とされるが、総合博物館で2011年に開催した企画展「埃及考古―ペトリと濱田が京大エジプト資料に託した夢―」に先立つ調査において、分光測定による染料分析および放射性炭素年代測定などの自然科学的手法を実施し、使用された染料および製作年代について精査を行った＊2。

その調査過程で、これらの登録資料のほか、エジプト遺跡出土の繊維製品が収蔵庫内の小箱に纏められていることを発見した。登録資料は陳列館に展示保管されていた履歴が認められるが、発見された資料群については、いつどのように小箱に納められたのか、経緯は明らかでない。これらの資料について、メトロポリタン美術館名誉館員梶谷宣子氏、生存圏研究所（当時）遠藤利恵博士の協力のもと、文様および織組織の観察、ならびに資料端部の実体顕微鏡による観察を行い、登録資料の一部であることが明らかとなった。

その一例を示す。写真1は登録番号〔1115〕hである。アイ植物（紺色）およびアカネ科植物（赤色）によって染められていることを報告したが、発見された資料断片（13×8cm、2×6cm）との接合状況により、陳列館にもたらされた当初の姿が復元でき、平織りの織り組織詳細や、その端部から織り技法についての考察を加えることが可能となった。

写真2は登録番号〔1126〕fである。貝紫染めであることを報告した。左（8×16cm）が目録掲載資料、



写真1 コプト織物（登録番号〔1115〕h）

写真2 コプト織物（登録番号〔1126〕f）

右（8×6cm）が小箱内にあった資料断片であるが、写真から、左右で発色の鮮やかさが異なることがお分かりいただけるだろうか。

登録資料の一部とみなされる、これら小箱内にあった資料のほか、未公表資料一点を含む繊維製品は、調査結果に基づいて、資料ごとに統一的に管理できるよう保管状態の改善を行った。得られた知見について、今後も引き続き報告を行う予定である。

「埃及スーダン発見 彩色 土器破片」

この資料が京都帝国大学に寄贈された1916年5月は、ちょうどD. R. マッキーバー（MacIver）とC. L. ウーリー（Woolley）らの調査報告により、「彩色土器」の研究が本格化し始めた時期にあたる。20世紀初頭までは、「Late pottery」、「Roman pottery」、「Coptic pottery」と様々な名称が与えられていた。先行研究や施文の特徴から、本稿では「彩文・スタンプ文土器」と呼ぶ。

彩文・スタンプ文土器は、主に現在のエジプト・スー



写真3 「ガースタング博士寄贈」ラベル

ダン国境付近（以下、北部）からアトバラ川とナイル川の合流地点にあるメロエとその周辺地域（以下、南部）にかけて分布する。近年の研究成果により、紀元1世紀から4世紀まで存続したことが明らかになっている。副葬品として出土し、住居址からの出土は少ないのが特徴である。地域的な傾向差としては、北部の方が他の土器群との相対的な出土比率が高く、施文される器種構成も多様で大型品が多い。他方、南部では器壁が薄く、碗形・カップ形を呈する器種の割合が高いほか、スタンプ文の割合も高い。文様は、アंकやウラエウスなど一見するとエジプトの影響を強く受けた意匠であるが、施文の方法や組み合わせはスーダン様式と呼べるものであり、独自に発展した様式であることがうかがえる。

目録に掲載されたスーダン土器は登録番号〔1190〕と〔1191〕の2件である。これらは写真3のラベルとともに収蔵室のケース内に保管されており、近くには同様の類似した土器破片が保管されていた。しかし、後者については登録番号の注記がなかったため目録には掲載していない。この未公表資料18点（表紙写真・写真4・5）について、スーダン考古学を専門とする関広が調査を行い、以下の知見を得た。

①器壁が薄く、碗形・カップ形に復元できる器形の破片である。②彩文やスタンプ文の様式が、海外所蔵のメロエ地域出土資料の文様と酷似する。③目録掲載の土器片は1909～1914年にかけてメロエ遺跡を調査したJ. ガースタング（Garstang）博士の寄贈品であり、資料の来歴を裏付ける。そしてその資料との形式や様式上の類似性が高い。

以上を踏まえて、未公表資料であった土器片18点も目録掲載資料とともにメロエ地域で出土したメロエ期の彩文・スタンプ文土器である可能性が高いと結論した。また、ループル美術館古代エジプト部門研究技師であるAminata Sackho-Autissier 博士にも写真による検討を行っていただき、上記相違ないことが明らかとなった。

ダン国境付近（以下、北部）からアトバラ川とナイル川の合流地点にあるメロエとその周辺地域（以下、南部）にかけて分布する。近年の研究成果により、紀元1世紀から4世紀まで存続したこ

ことが明らかになっている。副葬品とし

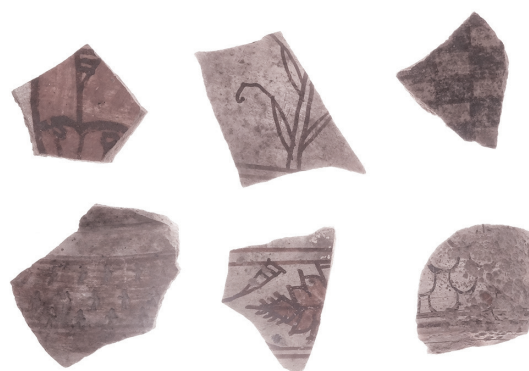


写真4 スーダン出土の彩文・スタンプ文土器（2）

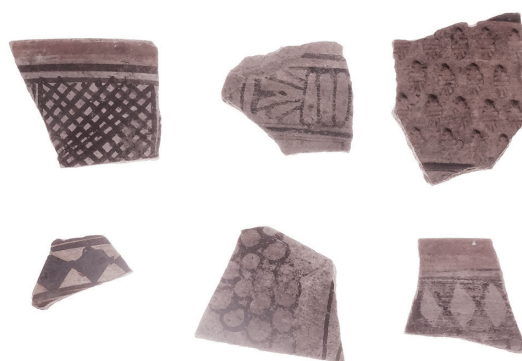


写真5 スーダン出土の彩文・スタンプ文土器（3）

当館所蔵のエジプト考古資料については、目録でもその特徴を明示したように、美術的に価値の高い資料を集成したというよりも、考古学を学ぶうえで幅広い時代・地域にわたった教材として有用な資料群と位置づけられる。日本で最初の考古学講座を開設した濱田耕作が、留学先であったロンドン大学のペトリ教授との交流をおして、日本における考古学と博物館学の発展のためにイギリスより将来したものである。今後は本資料群のもつ歴史的意義について、さらに解明を進めるとともに、引き続き未公表資料の公開につとめていきたい。

（総合博物館 准教授 村上由美子）

（総合博物館 研究員 横山 操）

（（公財）京都市埋蔵文化財研究所 調査研究技師 関広尚世）

* 1 京都大学大学院文学研究科考古学専修・京都大学総合博物館編 2016『京都大学総合博物館考古学資料目録—エジプト出土資料—』

* 2 横山操・中村力也・成瀬正和・村上由美子・東村純子・遠藤利恵・泉拓良 2015『京都大学総合博物館所蔵コプト織物の調査：分光法による染料分析』『考古学と自然科学』第68号

研究資源アーカイブ通信〈13〉

アーカイブズと私(2): 出口康夫先生(文学研究科)に聞く

京都大学研究資源アーカイブは、2018年5月に3年越しの資料整理を終えて「上山春平研究資料, 1807-2002 (主年代 1933-2002)」を公開しました。このうち今回が初公開となる初期草稿を中心に、文学研究科哲学研究室の出口康夫先生に見どころを伺いました。

(聞き手: 総合博物館 特定助教 齋藤 歩)

資料解説 1: [カントにおける象徴の問題]

——まず注目すべきは卒業論文でしょうか。1943 (昭和 18) 年 7 月と日付が入っています。

出口 上山は京都帝国大学の文学部を 1943 年の 9 月に繰り上げ卒業した後、すぐに海軍に入ります。この論文は、もう戦争にいくのがわかっている状況で書かれているはずですので、その緊迫感が読み取れます。例えば、論文の最初のほうで東洋と西洋を鋭く対立するものとして捉えたうえで、両立不可能な思想原理がこの大東亜戦争の背後にあるとの記述が出てきます。さらに、西洋近代ヨーロッパの克服は武力のみでは不十分で、思想的な超克もまた必要であると続けられています。

東洋と西洋を対峙させるのは、上山の師である田邊元を含む、典型的な京都学派の言説です。西田・田邊それからいわゆる京都学派四天王 (西谷啓治、高坂正顕、高山岩男、鈴木成高) といった人たちが、当時、こういった言論を繰り広げていました。が、注目すべきは、学徒出陣でまさに戦地に向かおうとしている若い上山のほうで、非両立性をより一層、強調している点です。京都学

派は、東洋と西洋の対立をここまで先鋭化しません。一見対立しているようだが、じつは根っこは一緒だとか、そういったよりマイルドな言い方もするわけです。

ところが上山も、上で紹介した箇所に鉛筆でバツ印をつけています [写真 1]。戦争が終わった後に読み返し、戦地に赴く前で殺気立っていて筆が走り過ぎたと考え削除したのかもしれませんが。一方、戦後に書かれた上山の未公開論文を見ると、西洋の民主主義と東洋、具体的には日本の天皇制は確かに異質だが、戦後日本の民主主義の課題は、この異質性を積極的に引き受けつつ、それらとともに含んだ国家を作っていくことにであると書かれています。ここには戦時中の考え方からの連続性と変化の両方が読み取れます。西洋と東洋の国家伝統を「異質」と見なす考えは戦後も一貫していますが、両者をともに全面的に肯定はせずに折衷的に受け入れていくことで、西洋の民主主義の直輸入でもなく、また戦前の日本とも一線を画す、新たな民主主義体制を作ることを目指すという独自の立場に向かったわけです。

戦中の学徒出陣の直前に書かれた卒論に時局的な言説を残し、それを後から消したうえで、戦後民主主義に関

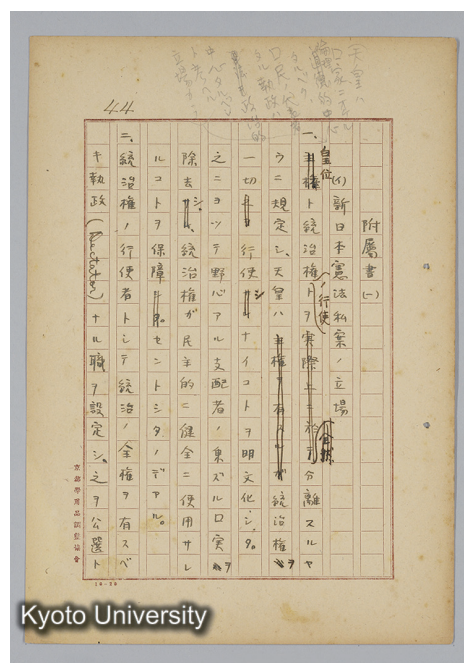
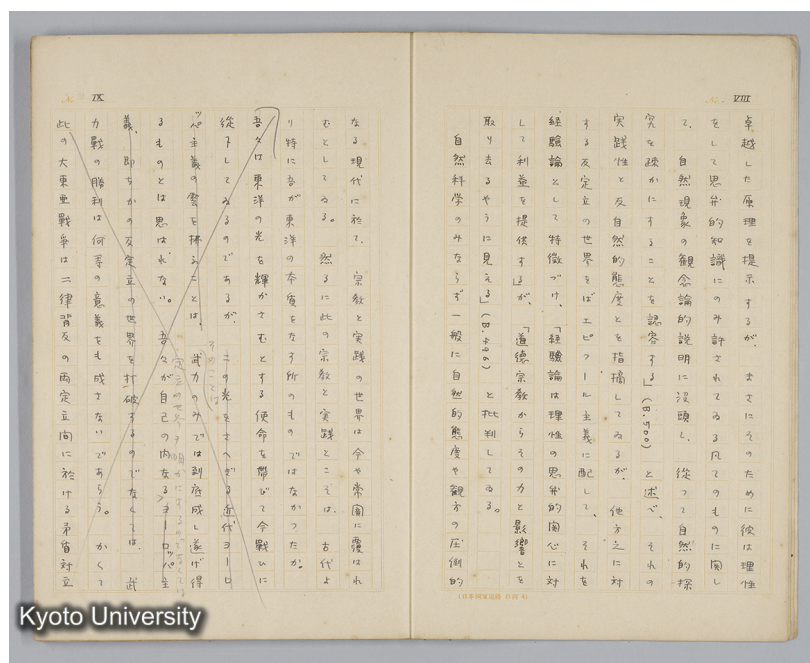


写真 1 (左): [カントにおける象徴の問題], FoSs MSS 2015/02/01-17-03. 写真 2 (右): 憲法草案 (私案), FoSs MSS 2015/02/01-06-02.

して折衷的な立場を標榜する。1943年から46年のわずかな数年のあいだに敗戦と占領と新憲法の成立という大きな出来事が相次ぎ、それらに敏感に反応して上山の思想的な立場も動くわけです。そういう一連の流れがビッドに読み取れるという意味で、これらの初期草稿は非常に興味深い資料だと言えます。

資料解説2：「憲法草案（私案）」「新憲法私案」他

——「連続性と変化」は、戦後に書かれた論文のどのあたりから読み取ることができますか。

出口 植民地で生まれ、内地の帝国大学に進学し、京都学派の影響を受けつつ、学徒出陣をして、九死に一生を得て生き残ったという経歴を持つ上山は、戦後、憲法改正をめぐる議論が沸騰する時代のるつぼに入っていくなかで、「憲法草案（私案）」「新憲法私案」（ともに1946）を書いたり「新憲法実施と日本民主主義」（年代不明）を執筆したりして、積極的に時代に応答していくわけです。とくに前者の憲法私案は、後年、上山が、戦後憲法を論ずるなかで、自分の半生を振り返りつつ言及することになる文章で、その存在は知られていましたが、今回はその原本が出てきたわけです [写真2]。

本人の回想では、自身の憲法案と戦後憲法との類似点だけが強調されています。確かに類似点もあるのですが、資料現物と比較すると、今度は、違うところも見えてきます。ただ、このあとに書かれたと推測される「新憲法実施と日本民主主義」では、上山はその違いを乗り越える形で、戦後憲法を受け入れていくことになります。

自らの「私案」こそ日本の伝統に即したものだという自負を持っていた上山には、その「私案」と戦後憲法とのギャップは、日本の伝統と戦後憲法との落差として映りました。しかし、あえてそのギャップを戦争の遺産として受け入れることで、自身の立ち位置を定めていこうとします。日本の伝統と西洋民主主義は互いに異質だと認めつつも、最終的には戦後憲法の民主主義を受け入れて、その一環としての象徴天皇制も受け入れるということです。ここにあるのは、民主主義を普遍的な真理であるとか無条件に正しい政治体制として手放しで称賛するのではなく、それを戦争の遺産として受け入れることで、日本の国家体制を、日本の伝統と米国に代表される近代ヨーロッパの伝統とのヘテロ（異質）な接合体へと変革していこうとするスタンスです。上山本人が、このような考えを明示的に述べているわけではありませんが、その都度、立場を変えつつ書かれた初期草稿を通時的に読むことで、そういうスタンスが見えてきます。



出口康夫先生

アーカイブズへの期待

——今後、どのような利用が期待できますか。

出口 日本研究の研究者は、海外にも数多くいます。彼ら彼女らのなかには、新しいトピックをいかに掘り起こすかを重視している人も多く、近年は、戦後の占領期の社会や文化に焦点が当てられてきています。というのも、占領期の機密文書の非公開期間がこの20年ほどで切れて、現在、多くの資料が公開される時期にあっています。そのなかには、研究のネタが山ほど詰まっているわけです。

このような占領期に関する研究の進展を受けて、その時代において個々の思想家がなにを考えていたかに今後注目がさらに集まると思われます。その意味で、京大の教員や関係者によって、占領期も含めた戦後期の草稿等がアーカイブズとして利用できるようになれば有意義だと思います。

現在、アジアの国々でも日本研究が盛んになりつつあります。そのひとつの理由として、近代日本が、アジアの国々の今後を考える際に、良い意味でも悪い意味でもモデルケースとなりうるということが挙げられます。非西洋社会で、自然科学がこれほどまで社会に根付き、ノーベル賞受賞者を輩出した例は、まだ他にありません。哲学思想分野でも、京都学派など、独自の哲学のムーブメントを生み出したケースは、これまた非西洋世界では稀です。一方、アジアに対する侵略戦争を引き起こし、学界もそれに加担したあげく無残に敗北し、戦後は公害問題も経験し、さらに原発事故も起こしています。このような日本の特徴は、日本人が思っている以上に、海外から見たほうが際立って映るため、日本の文化や学術史が、今後、世界でますます注目を集めていくだろうと思います。そうした海外での日本研究を後押しする役割を担ってもらうことも、京大の研究資源アーカイブには期待しています。

[2018年6月11日、文学研究科出口研究室にて]

(文学研究科 教授 出口康夫)

* 資料の写真は以下を参照しました。「上山春平研究資料, 1807-2002(主年代 1933-2002)」, <https://u.kyoto-u.jp/kurra-ueyama>

* インタビューの全文は、後日、京都大学研究資源アーカイブのウェブサイトにて完全版として公開予定です。 <http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

総合博物館日誌(平成30年3月～6月)

展示

▶足もとに眠る京都—考古学からみた鴨東の歴史— 飛鳥～室町時代編
(平成30年度企画展 京都大学文化財総合研究センター設立40周年記念展示 文化財発掘IV)

関連講演会

第1回 5月19日(土)

「足もとの歴史を探る—京大構内発掘40年のあゆみ—」

千葉 豊(京都大学文化財総合研究センター准教授)

「縄文時代の巨木の発掘と研究—北白川追分町遺跡の調査成果から—」

村上由美子(京都大学総合博物館准教授)

第2回 6月2日(土)

「遺跡発掘と自然科学—考古学とつきあって—」

竹村恵二(京都大学大学院理学研究科教授)

第3回 6月9日(土)

「梵鐘鑄造遺構の発掘調査から始まった梵鐘鑄造技術の研究」

五十川伸矢(鑄造遺跡研究会会長)

第4回 6月16日(土)

「中世公家の伝説と吉田地域—勧修寺家本『御遺言条々』を中心に—」

吉江 崇(京都大学大学院人間・環境学研究科准教授)

関連講座(京都市考古資料館文化財講座(京都アスニー 京都学講座の一環))

③ 3月24日(土)

「平安京建設以前の鴨東」

堀 大輔(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課)

④ 4月28日(土)

「古代の吉田神社」

笹川尚紀(京都大学文化財総合研究センター)

⑤ 5月26日(土)

「六勝寺の実像」

柏田有香(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

⑥ 6月30日(土)

「発掘調査の成果からみた中世の鴨東」
内田好昭(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

京都市考古資料館 第3回史跡ウォーク

3月10日(土)「京都大学構内の遺跡をめぐる」

レクチャーシリーズ

▶単体サンゴとホシムシ・ヤドカリとの数奇なる共生の進化

加藤 真(京都大学大学院人間・環境学研究科・教授)

2018年5月12日(土)

▶日本人と北米人ではものの見方が違う—探索課題で明らかになる視覚認知の文化差—

上田祥行(こころの未来研究センター・特定講師)

2018年6月19日(土)

総合博物館セミナー

▶サイエンス・イラストレーションの力～科学を伝えるということ～

大内田美沙紀(京都大学 iPS 細胞研究所 国際広報室 サイエンス・コミュニケーター/イラストレーター)

2018年3月9日(金)

▶アンモナイトの進化形態学

生形貴男(京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻 教授)

2018年4月13日(金)

▶アーキビストと考える京都大学のアーカイブズ<1> 研究資源アーカイブでの実務を例に

齋藤 歩(京都大学総合博物館 研究資源アーカイブ系 特定助教)

2018年5月11日(金)

▶アーキビストと考える京都大学のアーカイブズ<2> 大学文書館での実務を例に
元 ナミ(京都大学大学文書 助教)
2018年6月8日(金)

イベント

▶青空子ども博物館 in 円山 5月6日(日)

▶京都千年天文街道

第32回アストロトーク

2018年3月31日(土)

「春の星座の探し方と星の見かた」

杉野文昂(元神戸市立青少年科学館/天文グループリーダー)

「3Dメガネでみる宇宙のすがた～太陽系の外の惑星のお話～」

青木成一郎(京都大学天文普及プロジェクト室・室長/京都情報大学院大学・准教授)

第33回アストロトーク

2018年6月23日(土)

「夏の星空と七夕」

梅本万穂(星のソムリエ)

「3Dメガネでみる宇宙のすがた～火星と小惑星のお話～」

青木成一郎(京都大学天文普及プロジェクト室・室長/京都情報大学院大学・准教授)

博物館の刊行物

▶総合博物館収蔵資料目録第4号

「荒木両替店文書」

京都大学総合博物館(編) 2018年3月

入館者数

11,363名(うち特別観覧 51団体 5,185名)

発行日 2018年8月10日

編集・発行
〒606-8501

京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>